
ゼミにおける多重的節連鎖構造表現と応用

S06 (漢字表記)

要旨

本稿はゼミにおける多重的節連鎖表現の使用について、量的分析を行い、考察を加えた上で、日本語の外国人学習者にどう役立つかを研究したものである。分析により、質問者が発表者より頻繁に多重的節連鎖表現を使う。それに、会話における独特な、二人で多重的節連鎖表現を使って完成した現象もある。さらに、母語話者が外国人学習者より多く使っていることも分かった。より自然な日本語の表現形式として、多重的節連鎖表現が独話にかぎらず、通常会話、ゼミにも頻繁に使われている。ゼミにおける発話場面を注意して、より自然に多重的節連鎖表現を使えることは外国人学習者に役立つ点だろう。

キーワード

日本語、節連鎖表現、ゼミ、外国語学習

1. はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミ談話における多重的節連鎖構造表現について、種類によってどれぐらいの頻度で出現しているか、また発話でどのような機能を果たしているか、母語話者と外国人学習者の応用においてどのような違いがあるかを明らかにすることである。「節連鎖構造」とは節と節が文法的に連鎖する構造である。例えば、「今日は学校に行こうと思って、雨が降ったと気づいたから、また家に戻って、傘をとって行ったから、やっぱり遅刻して、先生に怒られた…」というような長く続く文が挙げられる。特に日本語の母語話者の日常会話や独話のなかで頻繁に現れる。留学生として、最初に母語者と対話をするとき、節連鎖表現を含む場面で、談話の要点をなかなかつかみにくいケースは少なくない。一方、日本語能力の向上に伴い、次第に自分も節連鎖表現が使えるようになることに気づいた。そこで、ゼミにおける節連鎖表現の分析を行い、さらに会話のどのような場面で用いられるか、日本人と外国人話者の使用区別を調べ、外国人日本語学習者がより自然に、より母語話者と近くゼミに参加することや、会話の要点をより簡単につかむことが期待されると思う。

2. 先行研究と本研究の位置付け

丸山 (2014) は、節と節が文法的に連鎖する構造を「節連鎖構造」と呼び、特に連用節が何重にも連なることが日本語で観察される。このような現象は現代の日本語に特有のものではなく、古典日本語にもすでに現れていた。近藤 (2005) によると、平安時代の節連鎖表現は「接続構文」と呼ばれ、前後の構文が必ずしも緊密な関係を持たず、基本原理が「付かず離れず」である。それに、このような構造によっていくつかの節がつけ足し重ねて、どれが主節であるかをわかりにくくなり、聞き手への説得を果たそうとする (近藤 2005)。

丸山 (2014) は、『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) という二つのデータベースを用いて、独話における多重的節連鎖構造を研究した。丸山 (2014) によ

ると、いろいろな連用節が何重にも連鎖して、発話全体が長く続く構造は「多重的な節連鎖表現構造」という。実際の発話で、多重的節連鎖表現がどのように分布しているか、生じる要因（特に「実時間性」）について考察している。前述したように、多重的節連鎖表現は一人で即興的な場合が圧倒的に多いので、丸山の研究において、独話のデータをもとに分析を行っている。まず、数多くの節連鎖表現を独自の発話単位「節単位」、さらにそのうち文末表現位置に相当する「節境界」をいくつかに分類した。前後の文の関係によって、節境界は大きく分けて、文末表現、並列節、理由節、条件節、その他という5つの種類がある。コーパスからデータを抽出して、節境界の数、出現頻度、また節境界の連鎖順番を考察した。分析の結果として、まず節境界の出現数は、話し言葉が書き言葉により多い。さらに、話し言葉で自発性の高い発話はより多い。書き言葉の場合、新聞が最も少なく、書籍が最も多い。新聞で最も多く出た節境界は「中止節」である。それに、節境界の出現頻度として、話し言葉は書き言葉より大きく、より多様であることを示している。結果に対する考察で、多重的な節連鎖構造が生み出される要因として、連用節によって発話を連鎖する日本語の文法的特性と、線条的に産出しなければならない話し言葉の制約と、それを産出するために必要な実時間性（リアルタイム性）があげられる。特に、実時間性について詳しく述べると、話し言葉の即興性と自発性による書き言葉との実時間の差は多重的節連鎖が出現する大きな要因であると考えられる。

しかし、以上の研究は独話を対象にした分析であり、対話を対象にした考察はなく、母語者と外国人学習者との違いを扱ったものはない。そこで、本研究ではゼミの対話における節連鎖表現を丸山（2014）の分類に従って、量的分析を行い、対話での役割を調べながら、母語話者と外国人話者との違いを考察したい。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某8人ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものである。

一つは、「外国語学習における絵本多読の可能性を探る」というテーマの論文についてのゼミ発表と質疑応答である。発表者が母語話者であり、質問者と参加者が6人いて、そのうち2人が日本人であり、日本人の先生が一人いる。もう一つは、「レポートを書く際における日本語学習者の不安」というテーマのゼミ発表と質疑応答である。発表者が留学生であり、質問者と参加者が同じく6人いて、日本人先生一人である。両方とも質疑応答が含まれていて、独話より、会話に近いともいえる。そして、両場面でも日本語の母語話者と外国人学習者が混在している。

分析の方法は丸山の節境界の分類に沿って、まず定量的分析を行う。また、多重的節連鎖表現が出現する発話場所と発話者の役割との相関性について分析する。つまり、どのような場面、かつ、発表者や質問者のどのような役割で多重的な節連鎖表現の頻度はより高いかを考察する。さらに、日本語母語話者と外国人学習者が多重的節連鎖表現を使う種類、頻度、順番の相違点について考察する。

4. 分析の結果と考察

4.1 多重的節連鎖の量的分析と機能分析

二つのゼミで、一つ目のほうは12回、二つ目のほうは7回、計19回多重的節連鎖表現が含まれる文があった。一回の文とそれにおける節境界の定量分析は以下のような例を挙げながら説明する。

① 質問者A：で/**テ節**/、日本語教育においても、たとえば、ま、特に、成人の学習者には、絵本だと/**条件節ト**/、まずたとえば学習者が抵抗を示すかもしれない、こう（発表者A：はいはい）、子どもっぽいとかいうのもありますし、語彙の面でも、あの、あ、そうですね、その、まず、伺いたかったのはその、絵本の（発表者A：はい）定義というか（発表者A：はい）、ここでいう絵本はどんなものかっていうのを先に伺わ、いたかったんですけども/**並列節ケ（レ）ド（モ）**/（発表者A：はい）、リストがあったので/**理由節ノデ**/（発表者A：はい）、こういうリストのものは全部取り入れてるんだっていうのは分かったんですが/**並列節ガ**/（発表者A：あ、はい）、あの一、あ、先程の（発表者A：はい）絵本リストですね。

例①のように発話のはじめから一つの句点、あるいは文末表現までの間で5回以上の節境界がある場合、一つの多重的節連鎖表現の文という。//のなかに具体的な節境界を説明する。

19回のうち、12回は質問者からのものであり、7回は発表者からである。つまり、発表者より質問者のほうは多重的な節連鎖表現をより多く使っている。先行研究の丸山（2014）によると、多重的節連鎖表現が書き言葉より話し言葉のほうで多く用いられている理由の一つとして、話し言葉の実時間性が短いので、常に準備した状態ではなく、繰り返して修正することが必要である。それを本研究の参考として、質問者より、発表者のほうが自分の発表内容を事前に準備したことがあり、確信を持って、ためらうことや修正することなく、発話することができるので、多重的節連鎖表現がそれほど多くない。それに、2つのゼミの発表者の違いを考えると、前者が母語話者であり、後者が留学生であり、後者のほうが発表するときより多く自分のレジュメに沿って発表したので、多重的節連鎖表現が比較的少ないのである。さらに、全体的に発表より質疑応答の段階のほうは多重的節連鎖表現が多い理由も同じく、発表が事前に準備できるが、質疑応答が大体その場での創出したものであるからだ。

これから談話例における多重的節連鎖表現から丸山（2014）による分類方法で、節境界を抽出して、その数と種類を数えて、結果を表1にまとめた。

表1から読み取れるのは、出現頻度が最も多い節境界はケ（レ）ド（モ）節である。一方、丸山（2014）の分析結果では最も多いのはその他のテ節である。つまり、総括に言えないけど、今回の研究にあるゼミでの発話はケ（レ）ド（モ）節をより頻繁に使う傾向がある。先行研究で示した、物事を説明するとき「トイウ節」をより多く使う傾向がある反対、本研究で発表者側にはそのような傾向がなかった。

発表者として、例を挙げて説明するときや、特に自分が不確実性を感じる内容について発表するときで、多重的節連鎖表現を使う。以下の例②、例③のように下線部の語句から発表者が自分の発話についてまだ不確実性を持つ感情が読み取れる。つまり、自分がまだできていない部分や、自信を持っていないところについて発言するとき、多重的節連鎖表現を使う傾向を示す。

並列節	ガ節	6
	ケ(レ)ド(モ)節	32
	シ節	2
理由節	カラ節	3
	ノデ節	12
条件節	タラ(バ)節	5
	ト節	11
	ナラ(バ)節	0
	レバ節	1
その他	中止節	2
	デ節	13
	テ節	24
	引用節	0
	トイウ節	2

表1 データにおける節境界の種類と出現頻度

② で、インタビューの結果はSCAT[スキャット]という Steps for Coding and Theorization という手法で分析を試みてるんですが、ちょっとここ一部だけ抜粋で載せてみたんですけども、文字起こしたもののの中から注目すべき語句を抜き出して、それをこう、もっと一般的な言葉で言い換えていって、どんどん抽出していくんですけど、やってみたらちょっとなんかこれで合っているのか分からなくていろいろすごくここで今つまづいているところです。

③ それで、えっと一、修論の構想発表会の時はあの一、私が日本語を教えている日本語学校の学生にも、50冊の絵本を見てもらってなにか難易度判定に近いものとかをしたらどうかとか話してたんですけど、まだ今ここまでしかできてない状態で、ちょっと今、あの一、分析自体にすごくつまづいているのと、ま、どういう方向でまとめたらいいかすごく迷ってしまっているので、いろいろご意見をいただけたらと思っています。

4.2 会話における多重節連鎖表現

会話には独特な多重節連鎖表現がある。それは、会話する二人は一つの文を完成することである。簡単にいうと、相手の次の発話を推測して、それを補足する場合である。今回の研究で用いたゼミ談話資料で、各ゼミ1回ずつ、計2回そのような多重節連鎖表現が現れた。以下の例②、例③に示したとおりである。

④

質問者 A1 : 難易度ってそもそも、能力試験のレベルとカーが基準になっているから /理由節カラ / (発表者 A : うーん)、その絵本の魅力が能力試験の語彙とか、文法とかと違うところにあるんだとしたら /条件節タラ /、そこに当てはめてしまったら /条件節タラ /、

発表者 A : うーん、あまり意味がない。

質問者 A1 : 普通の、あ、意味がないとは思わないんですけども /並列節ケ (レ) ド (モ) /。

(1 回目のゼミから)

⑤

質問者 B1 : ま、たぶんその、因子分析で、その一、出た結果をもとに、命名は、その、研究者自身が、本人が命名していいと思うんですけど /並列節ケ (レ) ド (モ) /、なーんとなく、第一因子のところ、日本語力の不足というふうに書いてあるんですけど /並列節ケ (レ) ド (モ) /、項目、を読んでいくと /条件節ト /、なんか書き言葉が (発表者 B : はい) 書けているかとか学術的な言葉とか、言葉を言い換えるとか (発表者 B : はい) 表現とか (発表者 B : はい)、日本語力をもう少し具体的に、見ていくと /条件節ト /、なんかこう、表現、文章に対する、その表現力
発表者 B : 表現の産出

質問者 B1 : とか (発表者 B : とか)、うーん、なんていうんですかね。

(2 回目のゼミから)

両方とも途中で発表者が質問者の質問内容を自分で推測し、話を補完した。両方も質問者の回数に算入した。これは先行研究にはなかった会話の多重的節連鎖表現である。発表者は質問者の質問内容について不確定さを察したので、相手への配慮を示したとも言えるだろう。

4.3 外国人学習者と母語話者の違い

	母語話者	外国人学習者
発表者	7	0
質問者	10	2

表 2 外国人学習者と母語話者の節連鎖表現の使用回数

表 2 が示したとおり、母語話者が外国人学習者より圧倒的に多く節連鎖表現を使うことが分かる。それに、ゼミに実際参加していた外国人留学生が母語話者より人数が多いので、人数が多いから使用回数が多いという理由も排除できる。したがって、それは恐らく日本語には多重的節連鎖表現の多用という特徴があるため、母語話者がより自然に使うことができる一方、外国人学習者がそれほど使わない傾向を示したわけである。日本の文化において、丁寧に表現を選択し、できるだけ他人の気持ちを傷つけない配慮を持っているため、常に前に戻して、修正することができる多重的節連鎖を好む理

由の一つであると推測できる。

以上の分析が示したように、人数が相対的に少ないにも関わらず、ゼミでの談話において母語話者がより多く多重的節連鎖表現を使うことが分かった。発表の内容と発表者の習慣とも関係があるが、質問者のみの場合も、やはり母語話者の使用が多いということは多重的節連鎖表現がより自然な日本語表現であるだろう。特に自分の発言に対して不確定だと思うとき多重的節連鎖表現を使っているの、発表するときより、質問するときのほうで適切であることは外国人学習者に役立つだろうと思う。

5. まとめ

本稿はゼミにおける多重的節連鎖表現の使用を考察した上で、外国人学習者にどう役立つかを研究したものである。分析に示したとおり、使用頻度において質問者が発表者より頻繁に使う。それは話し言葉の実時間性が短く、常に前に戻り、修正することが必要であるという理由に当てはまる。それに、会話をしている二人で多重的節連鎖表現のつながりを通じて、一つの文を完成したという現象もある。さらに、母語話者が外国人学習者より多く使っていることは分かった。つまり、多重的節連鎖表現がより自然な日本語として、独話にかぎらず、会話にも頻繁に使われている表現である。ただ、ゼミにおける使用は特に発話に対して自信がない場合、と婉曲な表現を使う場合が多いので、学習者にとって場合に沿って使うことがいい。

参考文献

- 丸山岳彦 (2014) 「現代日本語の多重的な節連鎖構造について CSJ と BCCWJ を用いた分析」 石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp. 93-114
- 近藤泰弘 (2005) 「平安時代語の副詞節の節連鎖構造について」『国語と国文学』82(11)pp. 114-124